

紀要『人文・自然研究』第18号

G・バタイユの〈エロティシズム〉と〈女たち〉
——エクリチュールは〈私〉とともに〈男〉も〈女〉も解体する——

神田浩一



2024年3月25日発行

一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究 第18号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 18



2024年3月25日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中 2-1

組版：精興社

G・バタイユの〈エロティシズム〉と〈女たち〉

——エクリチュールは〈私〉ともに〈男〉も〈女〉も解体する——

神田浩一

0. イントロ 〈男性の、男性による、男性のための〉エロティシズム？

20世紀フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）は、晩年の成熟期に上梓した主著のひとつである『エロティシズム』（1958）の序論で次のように述べている。

存在の溶解の動きにおいて、男性パートナーは原則として能動的な役割を演じ、女性側は受動的である。確立した存在として溶解するのは、おもに受身の女性側だ。が、男性パートナーにとって受動的な相手が溶解することは一つの意味しかもたない。すなわち二つの存在が混ざり合う融合を準備するという意味だ。そうして二つの存在は最終的にともに同一の溶解の地点へ到達する。ゲームのパートナーは通常の状態では閉じた存在なのだが、エロティシズムの完全なる実行は閉じた存在の構造を破壊することを原則にしている⁽¹⁾。

この序論は1957年2月12日に行われた講演「エロティシズムと死の魅惑」を大幅に書き換えて収録したものである⁽²⁾。この講演でバタイユが主張した死の魅惑、同性愛の役割、精神分析的アプローチの拒否などは聴衆に激しく批判されたが、その中にはバタイユの男性中心主義的な姿勢を糾弾する意見があった。

ソレダッド・ルケン夫人——単なる抗議です。私たち男性と女性はずねに一緒に生きてきましたが、私たちは未知なる「他者」のままであり、受動的な「対象」です。他の半分を無視しておきながらすべてを代表して語ることは少々ふさわしくないのではと思います⁽³⁾。

バタイユはルケン夫人の意見に対して直接には返答してはいないが、女性の尊厳を無視して女性を単なるエロティックな対象に還元しているという詰問に対しては反論をしている。

この対象への変化 [= 女性をエロティックな対象に変えてしまうこと] は、例えば『O嬢の物語』では確かなことですが、この対象と言われるものを、O嬢は本当に正しく描いていると考えることができるでしょうか？ O嬢の愛人がO嬢を対象とし、またO嬢が愛人たちに対して自分を対象としようとしませんが、そこから言えることは、この対象と私の鉛筆が似ていたとしても、無視できない隔たりがあるのだと私は思います。O嬢が私の鉛筆と似ているところがあるとしてもきわめて一時的な観点からでしかなく、一時的な観点から弁証法的な観点に移行するとこの対象は絶え間ない変化の中に埋没してしまうでしょう⁽⁴⁾。

バタイユにとって大事なものは、男性と女性の2つの存在の融合であり、女性のモノ化は



融合への一時的なジャンプ台のようなものでしかないので気にするべきものではないということだ。一方、女性のモノ化自体は否定していない。たとえ象徴的な死を共有することで自己の〈外〉に出て混ざり合うという〈融合〉を〈経験⁽⁵⁾〉することに重点が置かれているとしても、あくまでも能動的男性が受動的女性を象徴的に破壊し、女性は破壊という象徴的な死により自己の閉域から〈外〉に出るという図式は自明なものとして見られる⁽⁶⁾。

本稿は〈男性〉視点から捉えられたように見えるバタイユのエロティシズムに関する思索を〈女性〉の観点から読み解くことで、彼のエロティシズム思想の限界と可能性を提示することを目的とする。具体的には、バタイユが提唱するエロティシズム思想を性差別と批判する女性の声とその批判への応答を精査することで、個人的な資質や歴史的文化的な文脈において形作られたバタイユ思想の限界を示し、その限界を提示することで逆説的に見えてくるバタイユ思想の新たな可能性を探っていく。

1. 『眼球譚』を焚書に処すべきか？

70年代ラディカル・フェミニストの代表者として活躍したアンドレア・ドウォーキン(1946-2005)はその主著『ポルノグラフィ 女を所有する男たち』の中で「ポルノグラフィ」の存在を痛烈に攻撃した。ポルノグラフィは女性に対する暴力や抑圧の表象の忌むべき産物であるだけでなく、女性をもっぱら性的対象へと還元してしまうことで性差別や暴力を正当化して助長する教育装置としても作用しているからである。ドウォーキンはバタイユの『眼球譚』にも紙数を割いて激しく批判している。彼女の議論は性急で瑕疵も多いのだが、現在にいたるまで賛同者も多く、アメリカにおいてバタイユを論じる場合には、このドウォーキンが投じたフェミニズム的糾弾に対して何らかの応答をすることが必要なほどである。

ドウォーキンのバタイユ批判は次のような皮肉まじりの『眼球譚』の紹介から始まる。

ジョルジュ・バタイユの『眼球譚』は、1928年、フランスで最初出版された。特にジャン＝ポール・サルトル、ミシェル・フーコー、ピーター・ブルック、スーザン・ソントグが、この小説は深遠だと強く主張した。この小説を全般的なポルノ的な不純物と区別するために、これを「官能的」と呼ぶ人たちがいるし、質の高いポルノグラフィ——優美に構想されて、書かれたポルノグラフィ——は芸術であると主張するために、この小説を持ち出す人たちもいる。ソントグは、この後者の代表格である⁽⁷⁾。

毒を含んだ冒頭の言葉に続いて、ドウォーキンは論考の3分の2ほどの紙数を割いて『眼球譚』のあらすじを紹介する。その紹介は「優美に構想されて、書かれた」フレームの方には一切言及せず、ひたすら人物と出来事に焦点をあてている。そして『眼球譚』も数多のポルノグラフィと同じく、物語としては暴力的に女性を消費するものであることが強調されている。原著で7頁にわたって続くあらすじの紹介の後でドウォーキンは嘲笑的なコメントを述べる。

『眼球譚』を典型とする、上流階級の文学的ポルノグラフィの世界では、力の行使は死の手段であるために意味があるとされている。死は気絶するほどに素晴らしいセックスの



精髓なのである。死の暴力はセックスの暴力であり、死の美はセックスの美であり、人生の意味は、死であるセックスの意味の中に表されるだけである。この種のポルノグラフィを愛好する知識人は、死に感動させられている⁽⁸⁾。

ドウォーキンが何よりも憤慨しているのは「上流階級」の欺瞞的な態度に対してである⁽⁹⁾。『眼球譚』もあらずじを見れば、男性の性的欲望の充足にとって都合の良い女性が人格や尊厳を無視されて蹂躪され性的に消費される凡庸なポルノ小説と何も変わらない。にもかかわらず、物語に出てくる〈エロス〉が〈死〉という神秘的で崇高なものと結びつけられるや否や芸術として高く評価されるというごまかしが腹立たしかったのだろう。父権社会の体現者⁽¹⁰⁾であるとしか思えないバタイユが、「深遠な」死と結びついたエロティシズム思想——だがドウォーキンにとっては女性蔑視の思想でしかない——でアメリカの知識人に影響を与えることで女性解放運動の足を引っ張っているように思えたのだろう。

ドウォーキンの難詰に対して文学研究の観点から強く異議を唱えたのがスーザン・ルバン・スレイマンである⁽¹¹⁾。スレイマンは、ロラン・バルトのように物語のフレームに焦点を当てる「テキスト読解」とドウォーキンのように物語の内容だけを注視する「超テーマ読解」の2つの対比的な読解の功罪を対置する形でドウォーキンの読解の難点を明らかにする。その難点は次の言葉に尽きる。

彼女は「場面と人物」を見ることにあまりにも余念がないので、決してフレームを見ることがない。私がここで用いている「フレーム」とは、人生そのものではなく、特定の表現手段、要するにひとつの〈テキスト〉を通じて、組み立てられ、作り出され、取捨選択されたものとして人生を直接的、間接的に描く虚構の物語のもつすべての様相を簡潔に表現したものである⁽¹²⁾。

スレイマンは慎重かつ綿密なやり方でドウォーキンが見なかったものを挙げていく。保守的な文化に対してエクリチュールの観点から反旗を翻す前衛文学であるという、物語が書かれた歴史的な文脈、他の文学作品との参照関係、バタイユの理論的な作品との関連などが丁寧に挙げられていくと、スレイマンがドウォーキンの読解を「誤読」と断言しても頷ける。

しかしドウォーキンの「誤読」は2つの意味で価値も有しているとスレイマンは評価も下している。1つ目はバルトに代表される「テキスト読解」が『眼球譚』の内容に一切触れないという盲点を気づかせてくれること、2つ目はドウォーキンとは異なり緻密なテキスト分析を行使したアンヌ＝マリー・ダルディーニャとドウォーキンは同じ結論に到達していることである⁽¹³⁾。

さらに言えばスレイマンは「私たちの文化には女性に対する暴力を是認して強化するような何かがある⁽¹⁴⁾」と述べて、ドウォーキンの『眼球譚』の解釈を通じた女性解放の運動に対して政治的には賛成の立場を取っている。

スレイマンは、内容しか見ない「超テーマ読解」と内容を提示する枠しか見ない「テキスト読解」のそれぞれの盲点を克服しなければバタイユのポルノグラフィを正しくは捉えられないと考え、双方の読解で無視されている『眼球譚』の第二部に注目する。「暗号」と題された第二部では『眼球譚』の物語を構成する幻想に作家の実人生の基盤があることが解き明かされている⁽¹⁵⁾。スレイマンが留意するのは、盲目で半身不随の父親が、ある夜に突然発狂してわめきちらし、隣室に避難した母親に随行した医者に対して「おい、先



生、おれの女房といつまで乳繰り合ってたんだ！⁽¹⁶⁾」とかん高い声で叫んだ事件である。スレイマンはこの出来事を、息子にとってはそれまで無性であった母の身体が性的な身体であることに気づいた経験であると解釈する。そしてバタイユのフィクションにおいて侵犯行為は必ず女性の身体上でなされ、必ず男性の語り手に恐怖と歓喜を引き起こすことを指摘する。そこからスレイマンは様式化されたフレームで語られる『眼球譚』がエクリチュールのレベルだけでなく、内容においても凡百のポルノグラフィーと一線を画す理由を導き出す。『眼球譚』では男性の性的ファンタスムの核となる母の身体の二重性、魅惑と苦悩を同時にもたらす二重性が描かれるからだ。

スレイマンはこの気づきを高く評価しつつも、バタイユ（だけでなく男性作家全体）の洞察の持つ限界を〈女性〉の立場から指摘して論考を終える。

しかしバタイユのテキスト自身によって提供された洞察は、自身の限界を持っている。そしてそういうわけで注意深さに加えて批判的にも読まれなければならない。バタイユのテキストが自身に問いかけることができない問題の中には——なぜなら、そうするためには自身に対して歴史的距離と理論的距離の双方を持つ必要があるが不可能だからだ——次のようなものがある。母の身体が二重性を持つことに、つねに息子が苦悩と魅惑をもって気づく過程をたどらない性（セクシュアリティ）のモデルは私たちの文化に存在するのか？ 永遠に続くオイディプスのな侵犯と大文字の法のドラマ——つねに最後には大文字の法が維持されるドラマである——が説話において演じることがないテキスト性（テクスチュアリティ）のモデルは存在しうのか⁽¹⁷⁾？

2. 『眼球譚』では「男性のまなざし」は弱体化し崩壊し転倒する

クリス・ヴァンダーウィースは、わずかな例外⁽¹⁸⁾を除いてフェミニズム的読解では否定的評価しか与えていないバタイユの『眼球譚』を詳細に読み解くことで、フェミニズムに貢献する価値を見いだそうとする。その際に援用するのがローラ・マルヴィの「男性のまなざし」とアンジェラ・カーターの「道徳的ポルノグラフィー」という概念である。

ヴァンダーウィースはまず『エロティシズム』に述べられている理論に還元してバタイユの『眼球譚』を解釈しようとする多くの論者を2つの理由で退ける。1つ目は時間的な隔たりである。作家としてのキャリアの最初期の1928年に刊行された『眼球譚』と晩年の成熟期である1958年に刊行された『エロティシズム』には30年の時間的な隔たりがあり、そこには作家の思想的成熟を含めた変遷があってしかるべきだろうというものだ。2つ目の方がより重要だが、ジャンルの相違である。文学作品と理論的著作という表現方法の異なるジャンルが問題となる場合、一方を他方に還元するというのは不当な行為である。実際に『眼球譚』の登場人物のふるまいは『エロティシズム』で語られている理論とは齟齬が生じているとヴァンダーウィースは主張する。

本稿の冒頭でも見たように、『エロティシズム』で展開されている理論は、男性中心主義的なものとフェミニストたちに批判されて仕方がないものである。ヴァンダーウィースもこのフェミニストたちの意見に与するが、フィクションである『眼球譚』は理論的な著作とは異なった可能性を示していると考える。『眼球譚』はフェミニストたちにとっても有益な知見をもたらす可能性があることを示すために、フェミニストの映画批評家・理論家ローラ・マルヴィの「男性のまなざし⁽¹⁹⁾」という概念を援用する。もともと映画の分析装置として生み出された概念を文学作品の解釈に援用することの正当性を慎重に検討し



た後で、多くの映画作品のように、「ポルノグラフィ」 という文学ジャンルにおいても、女性は、視線の担い手である男性により何よりもまず見られるものとして作品内で陳列され、男性の性的欲望（窃視的欲望）に消費されているので、「男性のまなざし」という概念は適用可能であると結論づける。

『眼球譚』もまた他のポルノグラフィと同じく基本的には「男性のまなざし」によって構成された物語である。しかしヴァンダーウィースは見られるものとして創造されたシモーヌが作者バタイユの意図を離れてあたかも自立して「男性のまなざし」を惑乱するかのように振る舞うことに着目して子細に分析する。雄牛の睾丸をシモーヌが噛むシーン（目玉や卵にイメージの連鎖でつながっている睾丸を噛むのは去勢を想起させる）、続いて膣に雄牛の睾丸を入れるのと同時に闘牛士グラネロの眼球が雄牛によって貫かれるシーン（シモーヌは男性の助けなしに連続性へと溶融する）、セビリヤで神父の首を絞め、神父が射精とともに死を迎えることになるシーン（シモーヌは受動的な存在とは言えない）、最後にえぐられた神父の目玉をシモーヌが膣に入れ、その目玉が語り手の〈私〉をマルセルの目として見つめるシーン（見つめるのは女性のまなざしである）、それらのシーンのすべてにおいて、シモーヌは性行為のイニシアティヴを取り、男性に見られるより男性を見つめている。つまりシモーヌの行為は、男性のまなざしを弱体化させ崩壊させ転倒させている。

この事実は何を意味するか？ ヴァンダーウィースはアンジェラ・カーターのサド論を引き合いに出す⁽²⁰⁾。カーターによれば、女性をいたぶり性的な慰みものにしてしているサドの小説は、第一に性関係が現実の権力関係の反映であることを明らかにすることで、第二に日常生活とはかけ離れた性的状況の舞台を提示することでエロスの関係に想像力の飛躍をもたらしてくれるがゆえに、逆説的に女性に性的解放を果たす可能性を示している。ヴァンダーウィースは同様のことがバタイユの『眼球譚』にも言えると次のように結論づける。

シモーヌという人物の分析が示すのは、バタイユの『エロティシズム』における理論はジェンダーの構築について議論をする場合には彼のフィクションとは切り離さなければならぬだろうということであり、また彼のフィクションは単なる女性嫌悪の表現と言うよりは、むしろジェンダーの関係により広い批評をもたらす可能性を秘めているということだ。さらに言えば、シモーヌが男性のまなざしを弱体化させ、崩壊させ、転倒させたことは、バタイユの『眼球譚』とポルノグラフィ小説の持つ侵犯的な可能性について再考することをフェミニストに求めることになるだろう。

3. 結論 バタイユのエクリチュールは〈私〉を解体し、その結果、〈男〉と〈女〉も解体する

スレイマンもヴァンダーウィースも『眼球譚』を緻密に解釈しており、その議論はそれぞれ強い説得力を持っている。スレイマンは、母としては無性だが女としては性化された存在である母親の身体が持つ二重性をめぐり恐怖と歓喜におののく息子のドラマ⁽²¹⁾が描かれていると読み取り、ヴァンダーウィースは、「男性のまなざし」が瓦解し「女性のまなざし」に乗っ取られている様が描かれていると読み取った。両者ともに内容中心主義的なフェミニズム読解の盲点に対して物語を子細に読むことで得られる知見を補足しようという意図に満ちた、素晴らしい論考である。



しかし彼らの側にも盲点はないだろうか？ 両者ともにあまりにも女性と男性を固定したものと捉えていないだろうか？ 私たちはつねに女性であり男性であり続けるのだろうか？

ところでバタイユ本人は性に関しては本質主義者だとみなされかねないほど、男性と女性をその役割まで含めて固定したものと捉えていたようである。

わたしはここでは同性愛は取り上げないことにする。いま考察している全般的な構図に、同性愛は風変わりなヴァリエーション、二次的な興味しかないヴァリエーションを付け加えるだけだと思っただけである。またマゾヒズムも取り上げない。もしマゾヒズムがサディズムの過剰に——つまり主体の残酷さがついに最終的には主体自身へと移行することになるサディズムの過剰に呼応するものではないとしたならば、私の考えではマゾヒズムは性的特徴の変質したもの、すなわち男性的なふるまい方をする女性の前で女性的なふるまい方をする男性という性徴の変質にほかならない⁽²²⁾。

興味深いのは、バタイユのエクリチュールからは、バタイユ本人が意識的に考えていたと思われることとは異なった見解を導き出せることだ。すでに見たように、エロティシズムの本願とは擬似的な死である自己喪失によって連続性へ至り、パートナーと自己喪失を共有し交流することであった。バタイユのエクリチュールの主題の多くがこの擬似的な死に関するものである。ある時は、この擬似的な死の体験の記述であり、この体験への切望の表明であり、この体験への読者に対する誘いであり、また、ある時は、エクリチュール自体が体験そのものとなる。この自己喪失に関わるエクリチュールに着目することで、男女、その役割、その権力関係のはらむアポリアを突破することができるのではないだろうか？

ところで、バタイユのフィクションの多くはロード・オッシュュ、ピエール・アンジェリク、ルイ三十世などの筆名で公刊されている。それは謹厳な公務員が秩序紊乱を促すような本を公刊することで実生活に影響が出ることを慮ったというのが第一の理由であろうが、書いている〈私〉は〈私〉ではなくなるということを表現しているとも言える。バタイユの選んだ筆名は依然として男性の名前（そこでは決して父の名は選ばれない）ではあるが、〈私〉は〈私〉を形作る閉域の〈外〉に出る、すなわち擬似的な死を迎えることにより性別も超えていく。バタイユは『マダム・エドワルダ』の序文で次のように書く。

私は認識を忌避しているわけではない。認識がなかったならば、私は書くということができないだろう。だが今文章を書いているこの手は〈死につつまる〉。そしてこの手は、自分に約束されたこの死によって、文章を書きながら受け入れていた限界から、離れていくのである（この限界は、書いている手によっては受け容れられているのだが、死につつまる手によっては拒まれているのだ⁽²³⁾）。

難解な文章だが、書いているときの〈私〉の状態を表したものであるのは間違いない。「文章を書く」とは言葉が表す概念の連鎖を構築していくことである。場合によっては不安定な世界や自己を概念の操作によって明確に確定することもあるだろう。しかし引用では「死」と表現している自己喪失を至高の価値と見なしたバタイユにとっては、概念と概念の連鎖は否定的に「限界」と表現している。認識主体として論理に従って文章を築き上げている様相に重点を置いたのが「書いている手」であり、逆に認識主体が〈外〉へ向か



う動きとともに自己を喪失しつつある様相に重点を置いたのが「死につつある手」である。結局、引用は〈私〉が書きながら自己同一性を失い変容していく体験の描写であり報告である。

複数に分裂し、自己の〈外〉へと出て行くのは書く〈私〉だけではない。読む〈私〉も様々に変容する。確かに、もっぱら「性」が問題となるポルノグラフィでは読者は自分の身体性を意識させられる。実際に『マダム・エドワルダ』の女性翻訳者はあとがきで、男性の語り手がペニスを握ることで自己拡張を感じる描写に対して、ペニスを異物としてしか感覚できない自分は強い違和感を抱いたと述べている⁽²⁴⁾。

しかし物語に没入して読んでいる〈私〉は自分とは異なる性の登場人物に同一化できないわけではない。初老の男性がジョルジュ・サンドの『愛の妖精』を読み、少女ファデットの初恋のときめきを身体的なレベルで同一化して疑似体験をすることも可能である⁽²⁵⁾。読む〈私〉は年齢や性別や時代を超えて様々な自分に同一化してその人物の体験を（疑似）体験する。誰かに同一化しなくても物語空間を舞台のように見つめるような形で物語に没入することもあるだろう。大事なことは、書く〈私〉と同じように、読む〈私〉も読むという行為のさなかで〈私〉の閉域から離れるということだ。

ここまででは私たちがものを書いたり本を読んだりするときに起こるありふれた経験に過ぎない。バタイユのエクリチュールの特異性は、書くとき、読むときに〈私〉の閉域から離れるという現象に徹底的にこだわったことだ。例えば、バタイユは読者が読みながら〈私〉の閉域から離れ、書きながら〈私〉の閉域から離れるバタイユと自己喪失を共有する〈交流〉を求め、読者を〈交流〉へと誘う。

私の文章を読んでくれる君、君が誰であろうともかまわない。君の好運を賭けたまえ。

私がしているように慌てずに賭けるのだ。今これを書いている瞬間に私がしているように。私は君に賭ける⁽²⁶⁾。

結果としてバタイユのエクリチュールは、書きながら自己喪失を体験しつつ、その体験を論理的、情動的に説明、描写し、かつ読者を自己喪失へと誘うような多重性に満ちた異質なものとなっている。〈私〉から離れ、その結果、〈性〉からも離れたエクリチュールの実践においては、ケン・イツコヴィッツの述べるように、もはや男性が女性を不適切にコントロールするというようなフェミニズム的な問題は消失し、コントロールの放棄が起こっている。それはバタイユ自身が『眼球譚』を初めとするフィクションを中心としたエクリチュールの実践の中で示している。例えばシモーヌに絞殺される『眼球譚』の神父は、『太陽肛門』に出てくる「少女に、私は、お前は夜だと言って犯しながら喉をかききられたい⁽²⁷⁾。」というファンタズムが性と立場を反転させて生み出されたものである。

書きながら、あるいは読みながら、自己喪失の中で〈私〉を変容させ、様々な登場人物へと同一化することで、〈性〉を乗り換え、あるいは〈性〉を超えていく、バタイユ思想の可能性はそこにあると思われる。男性と女性を固定したものとして考えなければ、オイディプス的な状況にとらわれた男性のファンタズムのアポリアに囚われることも、「男性のまなざし」を「女性のまなざし」で反転させる必要もなくなるのではないだろうか？

註

(1) G. Bataille, *Érotisme, Œuvres complètes* t. X, Gallimard, 1987, p. 23. (ジョルジュ・バタイユ)



ユ『エロティシズム』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年28頁)

- (2) 雑誌『セルクル・ウヴェール』にタイプ打ち原稿として公開されたものが、バタイユ全集の注に抜粋して収録されている。Bataille, *Ibid.*, pp. 690-696.
- (3) Bataille, *Ibid.*, p. 695.
- (4) Bataille, *Ibid.*, p. 694.
- (5) 〈融合〉の瞬間にはその〈融合〉を〈経験〉する主体はもはや厳密には存在しないため、〈経験〉という言葉はあくまでも便宜的なものである。
- (6) この一見男性中心主義的に見えるバタイユの思考に対して、ケン・イツコヴィッツのように擁護する論者もいる。エロティシズムのような自己放棄や消尽などが優先される「一般経済学」の領域では、女性をコントロールすることではなく、放棄とコントロールの同時生成が問題になっているので、これは女性差別にはあたらないというのである。「バタイユが肩入れをするのは〔女性の〕コントロールではなく、放棄とコントロールの同時生成である。バタイユが肩入れをするのはコントロールに基づいた放棄であり、放棄に基づいたコントロールである。」(Ken Itzkowitz, "Feminism and the Problem of Georges Bataille", in *Her Voices Hermeneutics of the Feminine*, edited by Fabio B. Dasilva Mathew Kanjira-thinkal, University Press of America, Inc., 1984, p. 181.)
- (7) Andrea Dworkin. *Pornography: Men Possessing Women*. New York: Perigee, 1981, p. 167. (アンドレア・ドウォーキン『ポルノグラフィー 女を所有する男たち』寺沢みづほ訳、青土社、1991年、298-299頁)
- (8) Dworkin. *Pornography: Men Possessing Women*. New York: Perigee, 1981, p. 167. ドウォーキン、同書、309頁。
- (9) 実際にドウォーキンが手にした1978年の『眼球譚』の翻訳には、月並みなポルノグラフィーとは別次元にある芸術作品であることを誇示するかのよう、ロラン・バルトとスーザン・ソントグのエッセイが同時に収録されている。ソントグは「『眼球譚』は私がかつて読んだあらゆるポルノグラフィックな散文の中でもっとも芸術的に成果を上げたものである。バタイユの作品は私が知っている他の多くの作品以上に、ポルノグラフィーが芸術作品となりうる美的な可能性を示している」(Susan Sontag. "The Pornographic Imagination." *Styles of Radical Will*. New York: Doubleday, 1991. p. 65.) とバタイユをきわめて高く評価している。ドウォーキンはそのような知的な弁解をしつつポルノグラフィーを享受する態度に欺瞞を感じ取ったのだろう。
- (10) 「彼女にとって何よりも重要なことは、バタイユこそが女性を不適切にコントロールする制度の体現者の一人であるということだ。」(Itzkowitz, *op. cit.*, p. 176.)
- (11) Susan Rubin Suleiman, "Transgression and the Avant-Garde: Bataille's *Histoire de l'œil*." *Subversive Internt*, Harvard University Press, 1990.
- (12) Suleiman, *Ibid.*, p. 80.
- (13) 「二十世紀は文学においては主体の審級の完全な自由によって特徴づけられる。主体はつまるところその幻想、倒錯、隠された欲望についてすべてを語ることができる。それは申し分ないことであり良いことである……しかしそれではどのような声が聞こえてくるだろうか？ つねに男性の声である。そして彼らは何を言っているだろうか？ 何も新しいことはない。女性は危険である。女性は支配されなければならない。彼女たちの「肉」は〔男性的なモデルに対して〕彼女たちを順応化することで、あるいは彼女たちを死に向かわせることで支配されなければならない……いずれにせよ、彼女たちは抑圧されなければならない。」(Anne-Marie Dardigna, *Les Châteaux d'Éros, ou, Les Infortunes du sexe des femmes*, Paris, Maspero, 1981, pp. 312-313.)
- (14) Suleiman, *Ibid.*, p. 80.
- (15) そもそも『眼球譚』ははじめから物語として生み出されたものではなくアドリアン・ボレル博士の精神分析による治療の成果として生まれた作品である。
- (16) G. Bataille, *Histoire de l'œil, Œuvres complètes t. I*, Paris, Gallimard, 1970, p. 277. (G・バタイユ『眼球譚』生田耕作訳、河出文庫、2003年、143頁)
- (17) Suleiman, *Ibid.*, p. 86.
- (18) ケイト・ミレット (Kate Millett)、シルヴィア・プラス (Sylvia Plath)、アンジェラ・カーター (Angela Carter) などが挙げられる。
- (19) Laura Mulvey, "Visual Pleasure and Narrative Cinema." *Issues in Feminist Film Criticism*.



Ed. Patricia Evans. Bloomington: Indiana UP, 1990. 28-40.

- (20) Angela Carter, "The Sadeian Woman: An Exercise in Cultural History." London: Virago, 1997.
- (21) 母の身体をめぐる恐怖と歓喜を覚える体験と言えば、『青空』や『息子』で語り手の体験として語られる母の死体のそばで自慰にふける息子のエピソードを想起しないわけにはいかない。
- (22) Bataille, *L'Histoire de l'érotisme, Œuvres complètes., t. VII*, Paris, Gallimard, 1976, pp. 144-145. (ジョルジュ・バタイユ『エロティシズムの歴史』湯浅博雄・中地義和訳、ちくま学芸文庫、2011年、280頁)
- (23) Bataille, *Érotisme, Œuvres complètes t. X*, Paris, Gallimard, 1987, p. 262. (ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年、489-490頁)
- (24) 「翻訳とはいつでも異物を消化する作業ですが、バタイユを私が訳すとき、そこに異物として立ちのぼるのはあからさまな男性性です。『私は、まっすぐに隆起した性器を、片手で握った。』例えばこの記述の感覚を、私は肉体的に実感することはできません。
- 個人的な記憶ですが、中学生のときにこんなことがありました。休み時間に男子たちがふざけて遊んでいる。一人がペットボトルを股間の位置に合わせて握りしめ、『強くなった気がする！』と叫んでいる。他愛のない記憶です。しかしこの時のことはなぜか後まで記憶に残り、何か月かして、自宅の部屋でふとこれを思い出した私は、試しにペットボトルを手に取り、自分の股間にあててみました。ところが、そのペットボトルが私に与えた印象は、男子が感じていたであろうような自身の拡張感(?)ではなく、明らかに、自身に向かってくる異物としての存在感だったのです。」(アマゾンの電子書籍で公開された木口香恵訳『マダム・エドワルダ』の訳者あとがき)
- (25) フェッターリーやフェルマンの「すべての女性は男性として読むことを強制されている」という議論はこういった単純な読書経験からも賛同しがたい。概念化や論理を男性的なものとして退けて女性的なエクリチュールを実践しようとするイリガライの試みも、概念化や論理の制約を脱臼させようとした男性作家バタイユのエクリチュールとどこが違うのかが分からない。
- (26) Bataille, *Sur Nietzsche, Œuvres complètes., t. VI*, Paris, Gallimard, 1973, p. 110. (ジョルジュ・バタイユ『ニーチェについて』酒井健訳、現代思潮社、1991年、182頁)
- (27) Bataille, *L'anus solaire, Œuvres complètes., t. I*, Paris, Gallimard, 1970, p. 86. (ジョルジュ・バタイユ『眼球譚 太陽肛門／供犠／松毬の眼』生田耕作訳、二見書房、1971年、253頁)



Abstract

G. Bataille's "Eroticism" and "Women": "Écriture" that dismantles the "self" also dismantles "men" and "women"

Koichi KANDA

This article explores the relationship between feminist criticism, particularly by Andrea Dworkin, and Georges Bataille's "écriture." Much of the critical work on Bataille assimilates his sexist theories in *Erotism* with the manifestation of those theories in his fiction and essay without acknowledging potential contradictions between the two bodies of work. For instance, Susan Rubin Suleiman and Chris Vanderwees, in their close examination of Bataille's fiction, *Story of the Eye*, have discovered new possibilities in male-female relationships which may initially appear as misogynistic pornography. While the brilliance of these analyses is unquestionable, a shared blind spot exists in their consideration: fixed gender roles. The author takes note of Bataille's "écriture," which describes experiences where the writing-self and the reading-self transform and divide beyond self-identity, which becomes the experience itself and invites readers to partake in it. In the experience of venturing beyond one's own limits, traditional power dynamics between men and women cease to exist. Herein lies the potential of Bataille's philosophy beyond Bataille.



人文·自然研究 第18号